

古代日韓の都城以外の地域における初期瓦の検討

－朝鮮半島の中原地域と日本の九州地域を中心に－

文 玉 賢・李 仁 淑・張 誠 允・閔 庚 仙・崔 文 禎

- I. はじめに
- II. 古代日韓における都城の瓦
- III. 朝鮮半島中原地域における出土瓦の現状とその製作技法
- IV. 九州地域出土瓦の現状とその製作技法
- V. おわりに

要 旨 本稿では朝鮮半島と日本の都城以外の地域である中原地域と九州地域を中心に、6世紀から7世紀の瓦製作を観察し、その製作的特徴について検討した。中原地域の瓦は、高句麗や百済、新羅の製作的特徴を有する平瓦が確認でき、都城地域と類似するものや、異なる技法で製作された軒丸瓦とが混在している。地域や時期によって、多様な瓦が生産され供給されていた様相は、三国の激しい競争と領土拡大の結果と認識できる。これらには、遺跡を占有した三国の瓦製作と需要・供給方式、在地的伝統などが複合的に影響を及ぼしたであろう。中原地域を中心として都城の主だった情報を受容しつつ、独自の方法で瓦を製作・供給した生産グループの存在を推測することができる。

一方、百済から完成した形で造瓦技術が導入され、定型的に発展した近畿地域の瓦磚文化と異なり、九州地域は様々な方法を駆使して瓦を製作していた。九州地域の瓦作りに現れる多様な様相は、最近朝鮮半島内の遺跡で出土する瓦でも確認される事例が増加する傾向にある。九州地域の瓦は土器製作技術をもとに、当初は須恵器窯で生産されており、今後、朝鮮半島内の都城など各地域との関連性を具体的に検討する必要がある。

日韓におけるこれまでの瓦研究は、都城を中心に製作技法と需給関係、展開過程に関する検討が主流を占めてきた。都城以外の地域で多様な方式で製作された瓦が出土する現状において、中原地域と九州地域に限って瓦製作の一端を検討したが、今後、資料のさらなる蓄積と精密な分析を進めていけば、古代瓦の地域的特性やその展開過程をより総合的に把握することができると考えられる。

キーワード 都城 中原地域 九州地域 瓦 造瓦技術

文：国立江華文化財研究所
李：国立海洋文化財研究所
張：文化財保存科学センター
閔：国立加耶文化財研究所
崔：国立慶州文化財研究所

I. はじめに

瓦はその使用が始まった三国時代以降、その形状や使われ方にほとんど変化がみられない状態で現在まで製作・使用されてきた遺物である。韓国における初期瓦研究は文様がある軒丸瓦の分類と編年の設定に重点が置かれてきたが、現在は単純な編年資料を超えて、その時代の社会像を類推するための手段として研究の重要性および範囲が次第に拡大している。製作技術と製作集団の復元だけでなく、その時代の生産と流通体系の究明のために瓦は非常に重要な研究対象として認識されているのである。

朝鮮半島において瓦は三国時代初期から百済と高句麗でその製作が始まり、6世紀には新羅と日本などにも製作技術が波及したと理解されている。また、三国の争いや競争が激化するなか、都以外の地域でも主要な行政機関や寺院、官衙施設を中心に瓦の需要と供給が増加したと考えられている。最近、都以外の地域で三国時代の瓦が多量に確認されるようになったことで、都城とは区別される都城以外の地域の瓦製作における特性と需給のあり方を把握するための検討が進められるようになった。三国が国境を接する中原地域の場合、三国で確認される瓦製作の特性とともに在地的な特徴も確認されるため、都城のある地域（以下、「都城地域」と呼称）と異なる形態の瓦の製作と供給がおこなわれた可能性がうかがえる。一方、日本においても都城地域である近畿地域とは区別される九州地域の初期瓦の製作の特徴やその体系を分析した成果が多数蓄積されているのが現状である。

本稿は、朝鮮半島と日本における都城以外の地域である中原地域と九州地域を中心に、6～7世紀の瓦製作のあり方を探り、都城とは異なる製作の特徴の推定を試みるものである。これを通じて各国の都城以外の地域に現れる瓦製作の現況と関連性を検討し、両国間における瓦磚文化の形成と展開過程の一端について推定することとする。

II. 古代日韓における都城の瓦

1. 韓国

(1) 高句麗

高句麗は地理的に中国と国境を接するため、中国との頻繁な接触によって三国のうちもっとも早く瓦を使用したと考えられている。高句麗の瓦は、集安国内城で出土した「太寧四年」銘軒丸瓦によって少なくとも4世紀以前には製作されていたと推定されている。高句麗の瓦は平瓦とともに雲文や蓮華文、宝相華文、忍冬文、鬼面文などからなる多彩な様式の軒丸瓦、平瓦先端部に指先を押し付けて文様を付けた指頭文瓦などが使われた。

瓦製作時の瓦筒には模骨瓦桶と円筒形瓦桶の両方が使われていたことが知られている。中国と北朝鮮地域で出土した瓦の全容を把握するのは難しいが、少なくとも漢江以北の高

句麗遺跡で出土した平瓦は模骨瓦桶の使用頻度がより高いとみられる。模骨は2～6cmの幅のものが大多数を占めており、模骨を連結する横方向の紐痕跡が確認されるものは多くはない。素地は粘土板と粘土紐の両方が使われている。分割時には乾燥する前に側面を複数回にわたって切り取るため、分割界点の痕跡が確認されることは少ない。平瓦の叩き文様は主に縄目、格子目、線文、鋸歯文などで、7cm以内の叩き板を使用していたようである。また、瓦の側面の角部分を三角形に切り取り、屋根に据えた際に瓦と瓦ができるだけ間隙なく配置できるよう、あらかじめ面取りを施していることが特徴的である。

国内城の時期に初めて使用された高句麗の初期軒丸瓦は、主に雲文と蓮華文が施文されたものが製作された。雲文は春秋戦国時代の東周から登場し、秦・漢時代を経て非常に盛行した文様である。高句麗の雲文軒丸瓦は集安国内城と麻線墓区の西大墓、千秋墓などから確認されているが、瓦当面を線で4分割または8分割して雲文を配置するもの、年号や干支などの文字が記されているものもある。蓮華文軒丸瓦は6分割または8分割して蓮弁を配置し、蓮弁と中房は立体感が顕著で、蓮弁端部が尖ることが特徴である。

高句麗の軒丸瓦は平壤城期に至って多様化するが、これは高句麗が平壤への遷都を計画し、新しい都城を準備する過程で進んだ変化であったと推定される。この時期、雲文軒丸瓦はみられなくなり、4分割または6分割から8分割して蓮弁を配置した蓮華文軒丸瓦が多く製作され、そのほかにも唐草文、宝相華文、忍冬文、鬼面文のような多彩な文様で装飾された。蓮華文はそれまで使用されていた単弁様式以外にも細弁と複弁、重弁など多くの様式が採用され、蓮華文に鬼面文と忍冬文を組み合わせ配置した複合文も使用された。また、半瓦当軒丸瓦、鬼瓦、鳥衾瓦などの道具瓦が新たに製作されたりもした。高句麗の軒丸瓦は瓦当裏面の丸瓦との接合部を放射状に切り欠いた後、丸瓦を接合して製作するが、切断した丸瓦を裏面に接合するほか、切断していない円筒状の丸瓦をそのまま接合した後に丸瓦の体部以外を切断して製作するものが多い。一方、無文の平瓦先端部に指頭文を施した瓦は中国の影響を受けたものと推定される。その性格はあきらかではないものの、軒先の装飾用として使用された可能性があるようだ。

高句麗の瓦は国内城の時期には主に灰色調の焼成であったが、平壤遷都を起点として大部分の瓦が赤色に変化する特徴が見受けられる。

(2) 百濟

百濟は都を熊津から泗泚に移して以降、百濟在地の伝統とともに外来技術と文化的要素が融合した産物として発展を遂げる瓦磚文化を開花させた。百濟泗泚期の平瓦は模骨瓦桶の採用が盛行した。模骨瓦桶を利用した瓦製作の伝統は百濟漢城期から存在したもので、中国との交流を通じて流入したものと推定される。模骨瓦桶は模骨連結痕があるものとなっており、模骨の幅は4cm前後が大部分を占め、広いもので6～7cmのものもある。

る。模骨瓦桶は一般的に平瓦に使用されるが、益山王宮里遺跡、弥勒寺、信洞里遺跡出土の行基式丸瓦に模骨瓦桶が使用された痕跡が確認された事例もある¹。

瓦製作時、材料土を加工した素地は粘土紐と粘土板に区分され、熊津期以降では粘土板の使用が急激に増加する。粘土板の素地は陵山里廃寺など泗泚地域だけでなく、益山弥勒寺などでも多数を占めることから、大部分が粘土板で製作されるなかで粘土紐によるものが少数併存していたと理解される。

叩き板は多くが短板で、叩き痕は縦方向の弧状の曲線をなす。叩き板は線文が圧倒的に多く、格子文、縄文も少量確認される。弥勒寺では簡略化した形態の複合文が叩き調整された瓦も存在する。叩き板の長さはおおよそ7cm前後に還元されるが、陵山里廃寺出土品のなかには中板叩きに分類しうほどの大きさの単位文様が、長板叩きの技法のように施文されたものも見受けられる。

瓦桶から分離した粘土円筒を一つずつ分割する方法として、目印を基準として中から外に向かって切断線を引き、それによって分割する方法が多く採用された。しかし、刻印瓦と軒丸瓦は分割後に側面を整えるためのケズリ調整をくわえる技法を用いることもあった。このような分割方式の違いは、前者が「乾燥→分割」の順であった一方、後者が「分割→乾燥」の順で製作されていたため、製作手順の差ひいては技術系統の差異を反映する属性である可能性もあり、注目される²。

一方で、瓦生産に現れる硬度と色調は焼成上の温度と還元方法が大きく影響を及ぼす。また、窯内での瓦の積み方や焼成位置といった要因によって、意図せず差異が現れることもありうる。しかし、瓦の色調を変えらるために焼成過程で意図的に手を加えた可能性もある。例は多くないが、表面を黒くなるように浸炭させた瓦が官北里遺跡や王宮里遺跡、弥勒寺などで報告されたことがある。弥勒寺出土軒丸瓦のように、赤色顔料で彩色した痕跡がある瓦が製作された点を勘案すると、瓦に装飾効果をくわえるべく意図的に焼成過程で人為的なひと手間を加えた可能性は排除できないと思われる。

一方、丸瓦に接合する軒丸瓦は蓮華文、巴文、無文が知られている。そのなかでもっとも数が多い蓮華文軒丸瓦は、瓦当面に施文された蓮弁の形態によって大きく7種の文様類型に分類されるのが一般的である。個別の文様類型には、蓮弁の大きさと表現方式、中房の突帯の有無、蓮子の個数、間弁の表現方式など多様な形態の瓦範が製作され、使用されていた。しかし、同一の文様類型の軒丸瓦であるにもかかわらず、個別の瓦範によって作られた軒丸瓦は多様な製作技法を採用しており、軒丸瓦の文様系統が必ずしも軒丸瓦の製作工房および製作集団を示しているとは考えられない状況である。例えば、大通寺式と呼ばれる弁端円形突起型軒丸瓦の場合、中国の南朝および日本の飛鳥時代の星組集団と関連した造瓦系統の指標とみる見解が一般的であるが、実際に南朝ならびに飛鳥時代の星組の

技術要素として知られる回転成形および丸瓦の「片ほぞ接合技法」を採用した瓦範は、金德里窯址出土品など数例に過ぎない。もちろん、同じ文様類型ながら異なる瓦範を用いて製作された軒丸瓦のなかには、同一の製作技法を採用した事例もある。龍井里廃寺などで出土した弁端尖形の軒丸瓦がその一例だが、これらの文様類型は出土例が多くないため、生産主体が制限されていた可能性も推定することができよう³。同一の文様類型の軒丸瓦が多様な瓦範、そして様々な技法によって製作された状況は、複数の工房において図案を共有し、需要に沿って瓦を製作するシステムが備わっていた可能性が高いと理解される。泗泚都城を構成する多くの寺院や官衙などを建立し、それを維持・補修するためには文様および規格に統一性を持たせた瓦を短期間で調達できる環境が備わっていなければならなかったと推定されるからである。

(3) 新羅

瓦の製作技術が新羅にいつ導入されたかは明確にわかっていない。しかし、6世紀中葉に興輪寺と皇龍寺が創建されたという事実をもとにすると、遅くとも6世紀には新羅瓦が出現したと考えられてきた。また、新羅の蓮華文軒丸瓦の弁端形態を概観して、初期新羅瓦はそれぞれ百済と高句麗瓦の影響を受けたといわれてきた。ところが、もっとも早い時期の製作だと推定される新羅瓦が慶州勿川里遺跡の発掘調査で姿を現した。この瓦がすなわち無瓦桶の平瓦と弁端点珠式の蓮華文軒丸瓦なのである。

勿川里遺跡44号竪穴では無瓦桶平瓦が集線鋸歯文を施文した長頸壺と共伴し、51号竪穴では無瓦桶平瓦と弁端点珠式の蓮華文軒丸瓦が、ヘラ描集線鋸歯文とコンパス半円点文が施文された蓋、小型化した脚部をもつ台付椀とともに出土している。5世紀後半から6世紀前半と推定されるこの土器から、新羅瓦の出現時期は遅くとも6世紀前半、5世紀後葉まで遡及しうると考えられる。

近年、このような初期瓦が新羅王宮である月城遺跡の発掘調査で相次いであきらかになっている。特に月城西辺のA地区では弁端点珠式の蓮華文軒丸瓦4点をはじめとして、1000点を超える無瓦桶瓦が出土した。このほかにも、月城A地区では国内で出土例のない新しい形態の瓦も出土した。

まず、粘土紐を巻いて作った平瓦の側面に、瓦当のように粘土板を接合して作った瓦である。平瓦の側面と瓦当状の板が直角に接合されていて、瓦当状の端部にはナデ痕あるいはユビオサエがある。平瓦内面には粘土紐の痕跡と横方向のナデ調整の痕跡が観察される。全体的な形態は軒平瓦と似ているが、平瓦側面に粘土板が接合されているため典型的な軒平瓦とは異なる。さらに平瓦の横断面が一般的な平瓦よりもさらに扁平で、長さが15cm以上残存する場合には縦断面形が「S」字状に折れ曲がる。

次に、土器口縁部形の軒平瓦とともに三国時代の平瓦として挙げられている有段式平瓦

の存在である。平瓦下端部内側を「L」字形に切り欠き、端部が玉縁式丸瓦のようにみえるようにしたものである。月城A地区で出土した有段式軒平瓦は内面に布痕のみがあり、模骨痕跡はなく、円筒形瓦桶で製作したと考えられる。瓦の外面には線文も確認されるが、叩き板は短板である。これに似た種類の瓦が慶州の皇龍寺、多慶瓦窯址、安康六通里瓦窯址をはじめとし、扶余旧衙里の伝天王寺でも出土している。皇龍寺と伝天王寺では平瓦内面に模骨瓦桶を使用した痕跡が確認される。

月城の発掘調査では大量の新羅瓦が出土しており、新しい形態も確認されている。それにもかかわらず、これらの瓦がA地区最終廃棄層から一括で出土しており、具体的な年代を論じるのは難しい状況である。今後の月城の発掘調査の成果に期待することとして、ここでは新羅瓦を平瓦と軒丸瓦とに分けてその様相をそれぞれ観察したところ、次のようなことがわかった。

先に述べたように、新羅瓦のなかには百濟漢城期瓦の製作技法の一種である無瓦桶で製作された瓦が5世紀後葉まで遡る土器とともに出土した例がある。この瓦の形態が定型化に至らず不定形である点から、遅くとも6世紀前葉には新羅で瓦が製作されていたとみている。慶州では競馬場予定敷地C-1地区、蓀谷洞・勿川里遺跡、仁旺洞556・566番地遺跡などにおいて無瓦桶で製作された瓦が出土している。この瓦は瓦桶なしに粘土紐を丸く巻き上げていった後、外面を丁寧に横方向にナデ調整し、少数ではあるが短板で叩きを施す場合もある。無瓦桶で製作した丸瓦には百濟の軒丸瓦と類似した円形突起式の軒丸瓦当が接合することもある。競馬場予定敷地C-1地区では、無瓦桶で製作された平瓦、玉縁式丸瓦、円形突起式蓮華文軒丸瓦、土器口縁部形態の初期軒平瓦が共伴している。

模骨瓦桶で製作された瓦は慶州地域において少量確認される。6世紀前・中葉に比定される蓀谷洞・勿川里遺跡28号・29号土器窯の焼成室上面で、模骨瓦桶の瓦が土器の支柱として使用されており、皇龍寺回廊外郭からは模骨瓦桶の瓦が大量に出土した。これらからして、遅くとも6世紀中葉頃には模骨瓦桶で製作された瓦が使用されていたことが推定される。慶州地域で確認された模骨瓦桶の瓦の大部分には粘土板の素地が使われており、線文・格子文・縄文の短板叩き板で叩き調整が施されている。模骨瓦桶で製作された平瓦には円筒形瓦桶で製作された玉縁式丸瓦が共伴するが、模骨瓦桶の瓦の出土例がそれほどなく、まだその全体像を理解するのは難しい状況である。

円筒形瓦桶で製作された平瓦には粘土板の素地が使われ、格子文・線文が刻まれた叩き板で叩き調整されている。新羅の平瓦はほとんどが円筒形瓦桶で製作されているので、遅くとも7世紀前葉には円筒形瓦桶による製作法が主流とされていた。特に、円筒形瓦桶で製作された平瓦は慶州地域の横穴式石室墳の屍床、頭枕、足座として使われることもある。横穴式石室墳の特性上、追葬という要素があるため、遺物埋納時期の同時性を確保するこ

とはできないが、ある程度の時期は推定が可能である。慶州芳内里36号・40号横穴式石室墳では、6世紀末から7世紀前葉に編年される土器が円筒形瓦桶の平瓦と共伴している。

以上の3系統の平瓦と製作法が6世紀前葉以前から7世紀初めまで、やや時間幅を持ちつつ新羅で使用されていたことが推定される。崔英姫⁴によれば、それぞれの平瓦の製作法は単一主体が受容し、一つの製作技法が登場すると、ほかの製作技法が消滅するのではなく、7世紀前葉以降まで一定期間併存していた可能性が高いという。これは仁旺洞556・566番地遺跡において、3種類の技法で製作された平瓦が一つの建物遺構から共伴したことから傍証される。この3種類の平瓦の製作技術が単純な技術の差異なのか、工人あるいは工房の差異によるものなのかは確認することはできない。しかし7世紀以降、円筒形瓦桶の製作法に一変する理由は、新羅において王京造営事業による瓦の需要に応えるため、より効率的で大量生産が可能な製作法が必要であったためであろう。それによってほかの瓦の製作方法は徐々に消滅していったと推定することができる。

雁鴨池で出土した「儀鳳四年皆土」銘平瓦と蘿井で出土した「儀鳳四年皆土」銘平瓦をみると、679年には円筒形瓦桶の使用で一元化され、叩き板は変わらずに短板のものが主に使われていたことがわかる。この後、叩き板が長いものへ変化していくと考えられる。

一方、新羅の軒丸瓦研究の争点は軒丸瓦の導入時期と系統に関する問題である。前述したように、新羅の初期の軒丸瓦は6世紀前後に登場し、百済・高句麗の軒丸瓦文様の影響を受けたものであったとみられる。導入初期における軒丸瓦の文様は単弁蓮華文で、新羅が統一されるまでの約200年間、代表的な文様として使用された。単弁蓮華文軒丸瓦としては蓮弁内に装飾がまったくなく、蓮弁幅が広い広弁系の「百済系」軒丸瓦と、蓮弁幅が狭く、弁端が尖る狭弁系の「高句麗系」軒丸瓦がある。百済系軒丸瓦は競馬場予定敷地C-1地区、仁旺洞556・566番地遺跡、花谷里遺跡、六通里瓦窯址、月城垓子などで出土した。高句麗系軒丸瓦は蘿井、月城垓子、皇龍寺、芬皇寺で出土したが、百済系軒丸瓦に比して出土量は少ない。この二つの文様の差は技術系統の差異としてこれまで言及されてきたが、最近の研究では高句麗系軒丸瓦の代表的な接合技法と考えられた丸瓦被覆接合法が、高句麗ではなく百済漢城期の瓦から使われ始めたことがあきらかになった。むしろ、高句麗では軒丸瓦の瓦当裏面に丸瓦を直接接合するが、接合を強固なものとするために瓦当裏面や下端部に陰刻線を刻んだり、櫛歯状工具でかきやぶりを施す方法が使用されていたという。新羅出土の高句麗系軒丸瓦は、文様のモチーフとしては高句麗平壤出土品と類似し、技術系統は百済と一致するため、高句麗から新羅への直接的な製瓦技術の伝播は想定しにくい。百済系の円形突起式軒丸瓦は、大部分が無瓦桶で製作された丸瓦を接合する。百済系軒丸瓦の文様は百済熊津期の大通寺式軒丸瓦と類似するが、接合技法は百済漢城期に使用された円筒接合後分割技法である。一方、慶州六通里瓦窯址で出土した円形突起式軒丸

瓦の接合技法が丸瓦被覆接合法であることは、公州艇止山遺跡、扶余旧衙里遺跡出土の大通寺式軒丸瓦と類似する。この百済系軒丸瓦の文様および技術系統は百済熊津期に用いられたもので、大通寺式軒丸瓦が成立した6世紀前・中葉に相当すると考えられる。

6世紀後半から7世紀前半頃になると、百済系と高句麗系軒丸瓦の融合型と思われる新羅系軒丸瓦が登場する。新羅系軒丸瓦は六弁から八弁の蓮弁内に稜線や稜角が付される形態をとり、慶州の花川里遺跡、皇龍寺、興輪寺、靈廟寺、芬皇寺、月城垓子などの王京各地において大量に出土する。この軒丸瓦は大部分が丸瓦被覆接合法で製作されている。この技法こそ、百済系軒丸瓦に適用された円筒接合後分割法より効率的な製作技法として、瓦需要が増した当時の瓦生産体系にふさわしいものであったはずである。

百済泗泚期に流行した三角突起式蓮華文軒丸瓦と文様、接合技法、裏面の調整方法が類似した単弁蓮華文軒丸瓦が芬皇寺と慶州工業高等学校敷地で出土している。この軒丸瓦は丸瓦加工接合法と瓦当裏面の回転調整痕が特徴的であるが、このような百済系軒丸瓦の登場について、崔英姫は百済の工人が直接新羅に移動し、造瓦技術を伝えたと推定した。百済で三角突起式軒丸瓦が6世紀後半に製作されていることから、この時期以後を丸瓦加工接合法の上限として設定することが可能である。丸瓦被覆接合法が主に統一新羅時代以前に使用されているとすれば、丸瓦加工接合法は7世紀以降に積極的に用いられ、統一新羅時代まで持続したとみられる。

7世紀には複弁蓮華文軒丸瓦の周縁部内側に圏線で画された連珠文帯がめぐる蓮華文軒丸瓦も登場する。また、蓮弁内に子葉が施文された軒丸瓦も製作され、統一新羅時代に華麗に展開する軒丸瓦文化の過渡期的様相をみせてくれる。統一新羅時代以前の軒平瓦としては、競馬場予定敷地C-1地区、月城垓子などで出土した土器口縁部形態の資料が挙げられる。しかし、本格的な軒平瓦は統一新羅時代以降に登場し、様々な文様が多様に出現し発展する。

2. 日本・近畿地方⁵

百済は588年、大和政権の要請によって瓦博士をはじめとした工人たちを日本に派遣した。瓦博士の派遣は日本の寺院建築に瓦を初めて使用する契機となり、社会的には須恵器を作る土器工人を瓦工人に変貌させるという窯業生産工程の分化を促進させた。これによって、百済でもっとも流行した円形突起式および三角突起式の蓮華文軒丸瓦の文様が日本の軒丸瓦製作に大きな影響を及ぼすようになったのである⁶。

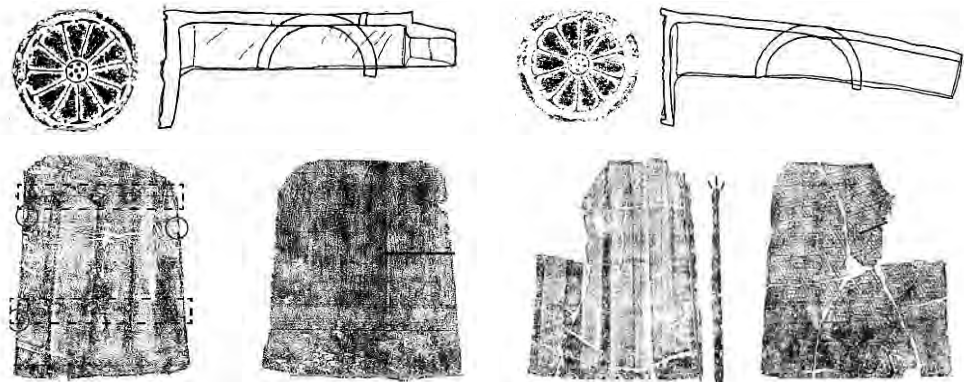
日本ではこの二つの軒丸瓦文様をそれぞれ星組・花組という造瓦集団に区分しており、飛鳥寺⁷では2系統の瓦双方が確認されている。この2系統の造瓦集団は軒丸瓦文様、平瓦の製作技術において差異をみせる。飛鳥寺で始まった造瓦技術は近畿地域の多くの寺院建築に波及していく。

既に日本の研究者は、主に軒丸瓦の文様と製作技法に注目し、7世紀以降の造瓦集団の展開について研究してきた。これに対して、崔英姫は平瓦の製作技法に着目し、造瓦集団の展開について検討した⁸。飛鳥寺における二つの造瓦集団の特徴を整理し、さらに近畿地域の7世紀代における生産遺跡と消費遺跡で出土した平瓦を分析したのである。そして、花組と関連する生産遺跡を隼上がり窯跡、星組と関連する生産遺跡を平野山瓦窯跡に比定した。

飛鳥寺で現れる星組の特徴は、弁端円形突起型の蓮華文軒丸瓦に玉縁式丸瓦を接合させる点、灰色あるいは黄灰色を帯びる同一の色調を示す平瓦は内面に模骨連結痕跡が観察できる点などが挙げられる。花組の特徴は、弁端三角突起型の蓮華文軒丸瓦に行基式丸瓦を接合させる点、色調は赤色を帯び、同じ色調の平瓦は内面に模骨連結痕跡が観察されない点などが挙げられる。

7世紀前半の瓦窯跡と寺院で出土した瓦を分析した結果、軒丸瓦の文様は二つの系統が混在しているものの、平瓦の製作技法においては一つの系統が確認される傾向が強い。これにより、造瓦集団を区分する要素は軒丸瓦の文様より平瓦の製作技法のほうが適切であると考えに至った。

しかし、7世紀第2四半期に至ると、平瓦の製作方式が隼上がり窯系統の技術要素として定型化され、花組・星組に代表される造瓦集団の区分は意味を失う。軒丸瓦の文様にお

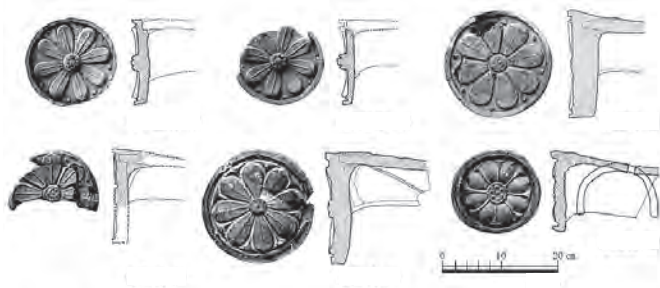


第1図 飛鳥寺出土星組の瓦

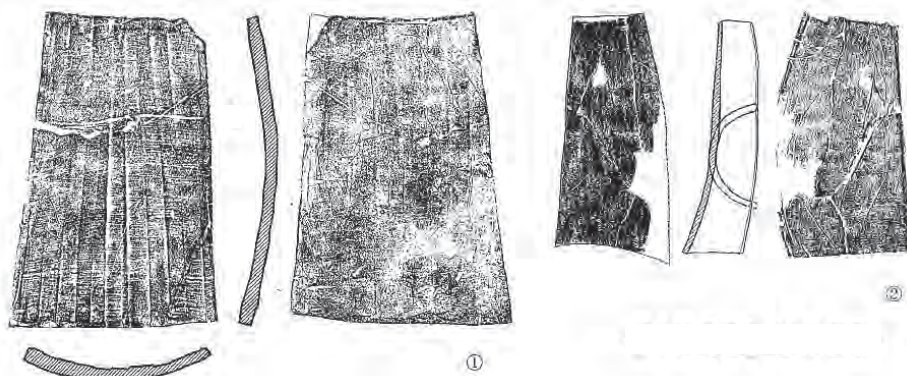
第2図 飛鳥寺出土花組の瓦



第3図 平野山瓦窯跡出土瓦



第4図 隼上り瓦窯跡出土軒丸瓦



第5図 隼上り瓦窯跡出土平瓦

いては造瓦技術の転換点であり、日本の造瓦体制の定着および拡散の出発点を示す代表的な遺物として、7世紀中葉の山田寺式軒丸瓦が言及されてきたが、崔英姫はこれより少し早い時期の奥山久米寺式の軒丸瓦をその代表遺物として挙げている⁹。

Ⅲ. 朝鮮半島中原地域における出土瓦の現状と生産の特徴

1. 中原地域の出土瓦の現状

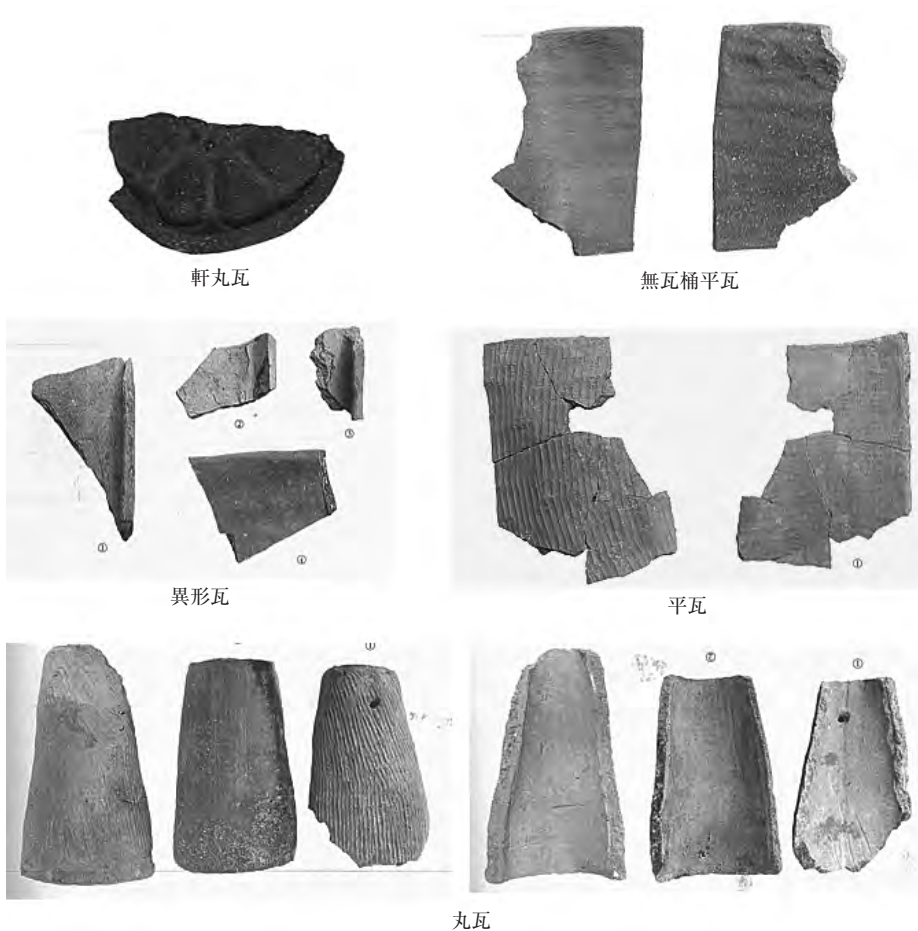
中原は忠清北道忠州を中心とする南漢江流域、または朝鮮半島中部の内陸地域を指し、新羅九州五小京の一つである中原小京が起源となったと知られている。中原地域は歴史上、政治、社会、文化的中心地となったことはないが、朝鮮半島の東西と南北を結ぶ地学的な要所として、古代から現代まで重要な拠点と認識されてきた。特に三国時代には、領土拡大と統一をなすための前哨基地として三国の激しい争いの場となった。

中原地域で三国時代に編年される瓦が出土した遺跡としては、報恩三年山城、清州父母山城、清原謳羅山城と壤城山城、陰城望夷山城、丹陽温達山城、忠州南山城と薔薇山城、大林山城、塔坪里遺跡、堤川長樂寺などがある。本稿では平瓦と軒丸瓦が共伴し、造瓦技術の特徴を比較的詳細に把握することができる報恩三年山城、清州父母山城、忠州塔坪里遺跡、堤川長樂寺の瓦の現況と特徴を詳しくみていきたい。

(1) 報恩三年山城出土瓦

報恩三年山城は『三国史記』によると、新羅の慈悲麻立干13年（470）に最初に築造された後、炤智麻立干8年（486）に屈山城とともに改築されたと伝えられる。城の周囲は約1,800 m、城の内外にそれぞれ石垣を築く城郭である。4基の門があり、城の内部から井戸、排水路などが確認された。三国時代から朝鮮時代に至る土器と瓦類が出土し、城郭が長期間利用されていたことが判明している。

三年山城で出土した三国時代の瓦は、多数の平瓦と蓮華文軒丸瓦1種類と異形瓦である。大部分の平瓦は円筒形瓦桶で製作され、粘土板の素地を用いたものとみられる。線文の叩き調整が施された瓦がほとんどであるが、一部縄叩きも含まれる。瓦の分割は内側から外に向かって刃先を入れて切断したとみられる。一部の玉縁式丸瓦と平瓦には内面に布目痕が確認されず、道具を利用して押し付けたり、手で調整したりした痕跡がある個体が見受けられるものの、無瓦桶成形技法によって製作されたと推定される。



第6図 三年山城出土瓦

軒丸瓦は圈線や突出のない中房を中心に置き、弁端が反転する八葉の蓮弁を配置した形態である。百済の大通寺式軒丸瓦や新羅の月城垓子、勿川里窯址などで確認された新羅の初期軒丸瓦の図案と類似している。軒丸瓦の裏面下端部に突帯が残っており、未分割の丸瓦を接合したのか、直接丸瓦を成形した後で下半部を切り除く方法によって製作されたものと考えられる。瓦当裏面は製作痕跡を丁寧に調整し、顎面には線文のタタキを施す。

一方、異形瓦は平瓦の両側面に瓦当のようなものが付けられた断面「コ」形の瓦である。特に瓦桶は使用しないようで、外面には線文や格子文のタタキが施される。

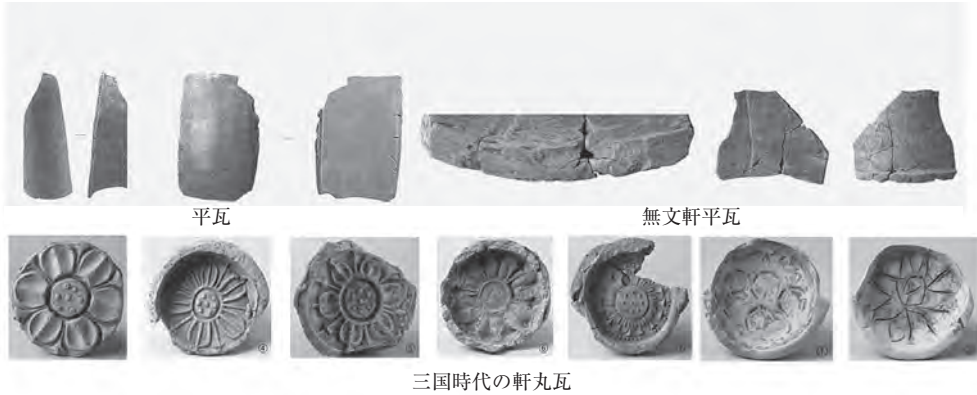
(2) 堤川長楽寺出土瓦

堤川長楽寺は南漢江上流に位置し、三国時代に創建された寺院として知られている。三国時代に築造されて以降、9世紀頃に長楽洞七層模磚石塔の建立をはじめとした大々的な寺域の整備を通じ、寺勢を上げた。高麗時代後期には寺院の規模が縮小し、中心寺域が移動するなど全般的な変化があったとみられる。以降、朝鮮・太宗7年(1407)、堤川地域の資福寺に指定され、天台宗系列の寺院として法脈を保っていたが、何度かの重修を繰り返し、18世紀頃に廃寺となったと推定される。

長楽寺で出土した瓦は多量の平瓦と7種類の蓮華文軒丸瓦、無文軒平瓦である。平瓦は模骨瓦桶と円筒形瓦桶で製作された個体がそれぞれ確認されるが、模骨瓦桶のほうが使用頻度が高い。粘土素地は主に細長い棒状を呈するものを使用する。叩き文様は線文が大部分を占めるが、格子文、縄文、無文などが確認されている。瓦の分割は主に中から外に向かってヘラを入れて分割しているが、一部外から中に刃を入れて分割する瓦も混在する。

軒丸瓦は、瓦範に粘土を詰めて製作した5種類の蓮華文軒丸瓦のほか、印章を何回か押し付けて文様を表した軒丸瓦、文様を線刻した軒丸瓦が確認された。瓦範で製作された軒丸瓦はどれも六葉蓮華文で、単弁と複弁が混在する。単弁蓮華文の場合、蓮弁を肉厚に表現したものと、蓮弁と間弁、稜線が陽刻線で表現されたものに大別できるが、前者は忠州塔坪里遺跡でも確認されている¹⁰。複弁蓮華文は肉厚の蓮弁が二つずつ配置されていて、蓮弁端が高く反り返る形態である。印章を押し付けて文様を表した軒丸瓦は直径3.3 cmの印章を中央に1回、周囲に沿って7回押したもので、文様は不明瞭である。一方、文様を線刻した軒丸瓦は中央部に中房を、周辺に七葉の蓮弁を簡略に表現したもののだが、文様は整然とは表現されているとはいいがたい。これらの軒丸瓦は文様形態と表現方式にわずかながら差異をみせるが、丸瓦の接合技法と調整技法は類似している。単弁蓮華文軒丸瓦における丸瓦の接合は丸瓦端部が周縁を兼ねたり、周縁部に粘土台を足し、その粘土台上に丸瓦を接合したりし、複弁蓮華文軒丸瓦は周縁の上部に丸瓦を重ねて接合していた。軒丸瓦の裏面と顎面の調整方法はどれも線文叩きによる方式が用いられた。

一方、長楽寺で出土した無文軒平瓦は成形および分割段階を経た平瓦の一方の端部をほ



第7図 堤川長楽寺出土瓦

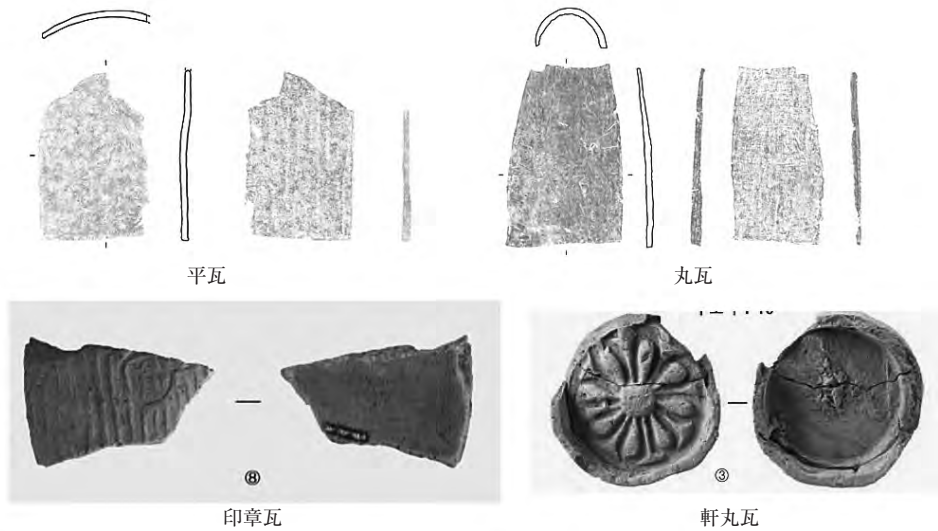
ほぼ直角になるように折り曲げて製作したものである。瓦当表面をケズリやナデで調整し、一部には瓦当に横方向の溝を施文したものもある。瓦当側面を傾斜するようにケズリを施し、一般的な軒平瓦の瓦当と変わらない形態に作ったものも確認された。

(3) 清州父母山城出土瓦

清州父母山城は山頂式石築山城として新羅が築造し、のちに百済が修理して使用、さらに新羅が増築した山城として知られている。これまで北門と西門、集水遺構などが調査され、三国時代の瓦と土器類などが多数出土した。父母山城で出土した瓦は平瓦と刻印瓦、3種類の蓮華文軒丸瓦がある。

父母山城で出土した平瓦は模骨瓦桶と円筒形瓦桶で製作され、瓦桶表面に麻布筒を付けたもののほかに、葦のような植物の幹を紐で編んで作った簾状の筒を使用した個体が多数確認された。瓦桶表面にまず簾状筒をかぶせ、その上にさらに布をかけて製作された個体もある。素地はほとんどが粘土板によるもので、叩き文様は主に線文が大多数を占めるが、調整して無文のようにみえるものも多い。瓦の分割は中から外に、または外から中にヘラの刃を入れて切断しているが、2～3回ほどヘラを引き、調整したものもある。平瓦のなかには外面に刻印された瓦が大量に確認されており、「前」「北」「大」の銘文が刻まれている。

一方、父母山城で出土した軒丸瓦は突出した中房を中心に、八葉の蓮弁と「T」字形の間弁がそれぞれ配置された文様をとる。中房に表現された蓮子の個数によって3種に分類されるが、蓮子が表現されないものと中房に細い棒状の道具を突き刺し、三つないしは四つの蓮子を表現したものがある。軒丸瓦の裏面には布目と円筒形丸瓦の切断痕が残るものがあることから、丸瓦の成形型を縦方向に立てた後、丸瓦と瓦当部を同時に成形し、上部から瓦範を押し付けて施文した後、不要な丸瓦下半部の粘土を切り取るという方法で製作されたとみられる。



第8図 清州父母山城出土瓦

(4) 忠州塔坪里遺跡出土瓦

忠州塔坪里遺跡は、新羅が南漢江流域に進出後に置いた中原京の中心地と推定されている遺跡である。住居や建物、製鉄遺跡など多様な生活遺構が確認されたが、百濟ならびに高句麗、新羅が次々占有した痕跡が顕著に認められる。塔坪里遺跡では平瓦と軒丸瓦3種、軒平瓦2種が出土した。

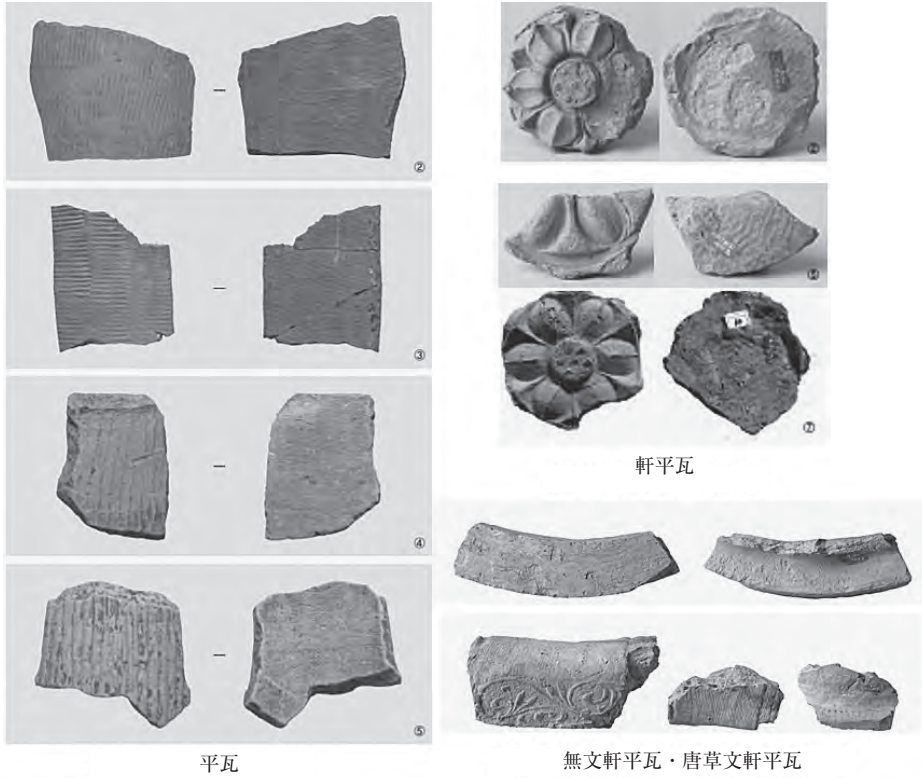
平瓦は大部分が破片で出土したため全体はわかりにくい、ほとんどが円筒形瓦桶で製作され、粘土板の素地を用いて成形されたとみられる。主に叩き文様は線文で、中から外へ、または外から中へヘラを入れて分割している。

軒丸瓦はみな六葉の蓮弁が配置された文様型式で、蓮弁は端部が尖り、中央に稜線を置くもの、蓮子がない中房に楕円形を呈する蓮弁が施文されたもの、肉厚の蓮弁中央に稜線を置くものがある。前者は堤川長楽寺で出土したものと同一型式である。これらはどれも瓦当部に丸瓦をかぶせるように接合する製作方法で、裏面はタタキ調整を施す。

一方、軒平瓦は無文軒平瓦とともに唐草文軒平瓦が確認された。無文軒平瓦は堤川長楽寺で出土したものと同一のもので、無文と唐草文軒平瓦はどれも、端部を直角に折り曲げて変形させた平瓦を用いていることが特徴的である。唐草文軒平瓦は平瓦端部を折り曲げて瓦当部分を作り、そこに瓦範を押し付けて製作するという特徴をみせる。

2. 中原地域出土の瓦における製作上の特徴

中原地域において三国時代の瓦が出土した遺跡の大部分は山城であり、生活遺跡はわずかである。これは三国が要衝の地に築造した山城を占有し、中原をめぐる熾烈な争いを繰



第9図 忠州塔坪里遺跡出土瓦

り広げた様子を代弁しているかのようである。ところで、中原地域で出土した瓦は三国の都城地域で確認されるものと類似しているものの、わずかに差異もあることから、どの国に属したものか明確に区分することは容易でない。

まず、平瓦は三国の都城地域で出土した瓦と大同小異の製作上の特徴をみせる。報恩三年山城において出土した平瓦は主に円筒形瓦桶で成形され、一部に無瓦桶の成形技法によって製作された個体もあることから、新羅の平瓦の製作方法と非常に類似している。一方、堤川長楽寺出土の平瓦は粘土紐を利用し、模骨瓦桶で製作した個体の割合が多いという特徴がみられる。模骨瓦桶の使用は百済の瓦における一般的な特徴であるが、主に粘土板の素地を用いた泗泚期の瓦とは多少違いがあることから、泗泚期以前に製作された瓦である可能性がある。清州父母山城の平瓦も百済における平瓦の製作方法と軌を一にする。父母山城の平瓦では模骨瓦桶と円筒形瓦桶を使用した個体がそれぞれ確認され、瓦桶に用いる布筒は布と簾が使われた。簾は大田鷄足山城、光陽馬老山城など、百済の外郭地域で主に製作・使用されたことが知られている。また、父母山城では百済の瓦で確認される刻印瓦も多数出土し、百済による瓦製作の様相を推定できる。

中原地域で出土した軒丸瓦は、文様と製作方法において三国の都城出土品とは類似性と

差別性が共存している。清州父母山城出土の軒丸瓦は文様の図案と表現手法が三国の都城で出土するものとは区別される。また、製作方法にも多くの違いがあり、丸瓦の成型型を縦に立てた状態で瓦当部を含む丸瓦を一気に成形し、上部に瓦箆を押し付け、不要な丸瓦下半部を切り取る「縦置型押捺施文法」で製作された。そのために瓦当裏面から丸瓦まで布目痕が残っており、瓦当裏面下端には丸瓦の切断痕が残存している。このような製作方法は太田鶏足山城と鳥致院鳳山里山城で出土した軒丸瓦とも類似する。

一方、報恩三年山城出土品は百済の大通寺式軒丸瓦や新羅の月城垓子ならびに勿川里窯址の出土品と類似した図案が使用されたが、その製作方法には違いがみられる。三年山城出土軒丸瓦は瓦当の製作後、未分割の状態の丸瓦を接合してそのまま成形した後、丸瓦の不要部分を切り取る方式で製作されていた。これと類似した事例は新羅の月城垓子出土品に見出すことができる。ただし、三年山城出土品は瓦当部裏面の製作痕跡が丁寧に調整されているため、正確な製作方法はわからないが、前述した父母山城出土品のように縦置型押捺施文法によって製作された可能性は排除しにくい。

忠州塔坪里遺跡と堤川長樂寺からはいわゆる「中原様式」と呼ばれる軒丸瓦を中心に、多様な文様形式の軒丸瓦が確認された。忠州塔坪里遺跡と堤川長樂寺でともに出土したいわゆる「中原様式」の軒丸瓦と、堤川長樂寺で出土した押捺施文および陰刻施文軒丸瓦は、同じ文様型式が三国の都城で確認されていないが、そのほかの文様の軒丸瓦は芬皇寺と九黄洞苑池、皇龍寺出土品など新羅の軒丸瓦と関連性がある。製作方法は両者ともに、瓦当部に丸瓦をかぶせるように接合する方法と、瓦当裏面と側面にタタキを施す方法をとっているが、これはいずれも芬皇寺など新羅遺跡から出土するものと共通する。

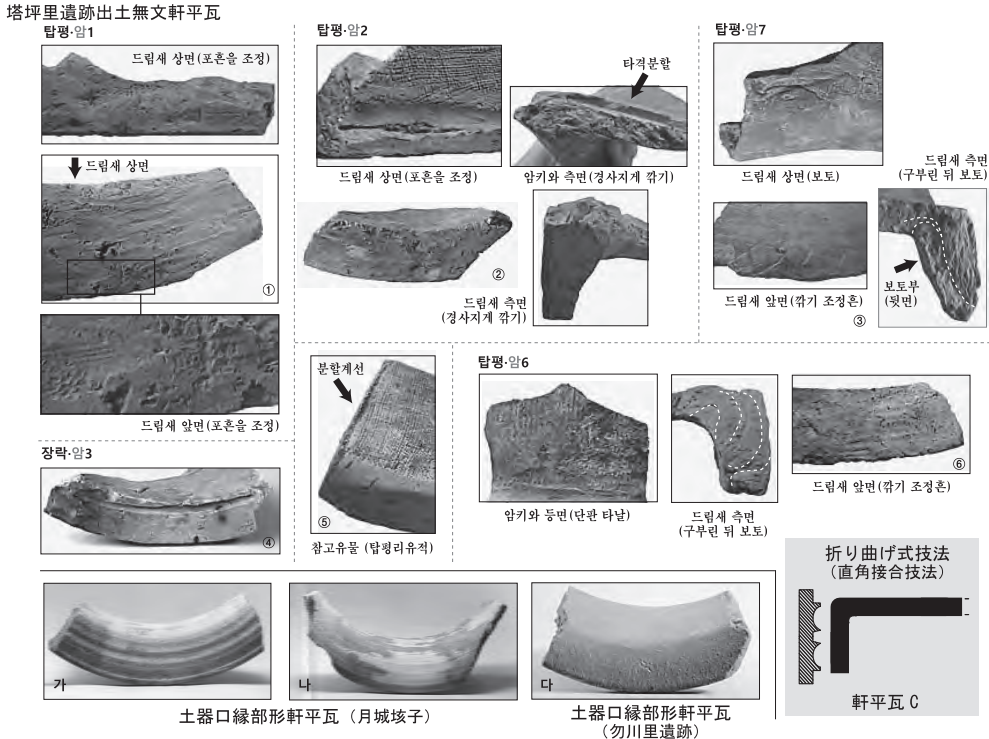
一方、忠州塔坪里遺跡と堤川長樂寺で出土した無文軒平瓦、忠州塔坪里遺跡で確認された唐草文軒平瓦は中原地域に限定的な特徴をみせていることから、注目される。類例として、百済の扶蘇山城、新羅の月城垓子および勿川里遺跡で確認されたものがあるが、扶蘇山城出土品は模骨瓦桶で製作された平瓦を作り替えたものであり、月城垓子と勿川里遺跡などで出土した軒平瓦は平瓦の下端に土器口縁部状の瓦当部を接合したものであるため、円筒型瓦桶で製作された平瓦端部を折り曲げて作り替えた中原地域の出土品とは異なる。また、忠州塔坪里遺跡で出土した唐草文軒平瓦は平瓦端部を折り曲げて瓦当部を成形したのちに文様箆を押し付けて製作されたもので、百済地域では稀である。新羅の四天王寺と東宮・月池で、瓦箆を押し付けた無顎式の唐草文軒平瓦が製作されていたが、中原地域の唐草文軒平瓦とは隔たりがある。中原地域の無文軒平瓦と唐草文軒平瓦は新羅の軒平瓦製作の情報がこの地域に伝わった後、製作方法をよく知らない在地の工人によって生み出された形態である可能性がある¹¹。

中原地域の瓦は、百済と高句麗で主流の模骨瓦桶で製作された瓦、新羅で製作された円

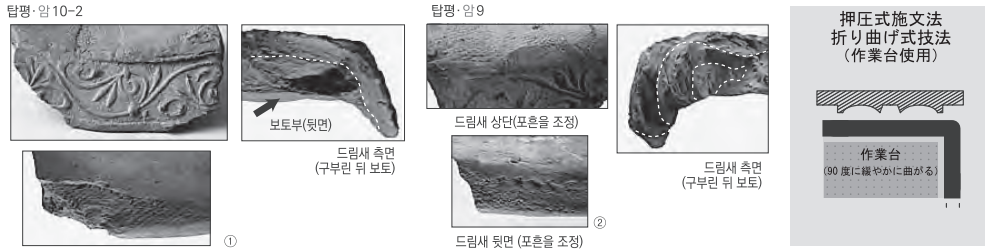
筒形瓦桶による瓦、百濟漢城期・新羅で用いられた無瓦桶の瓦など多様な種類が確認され、都城地域と類似したものや、ほかの技法で製作された軒丸瓦も混在している。これは中原地域で瓦の製作が多様な方法で活発におこなわれていたことを意味するが、三国の都城における瓦製作および需要・供給システムとは異なっていた可能性を推定しうる¹²。中原地域での瓦製作と調達には都城の瓦製作集団が直接的に影響を及ぼしたり、三国の瓦製作技術の影響を受けた在地の瓦製作集団が、中原地域で小規模の需給圏域を形成し活動していたりした可能性がいずれも想定される。



第10図 縦置型押捺施文法の復元と軒丸瓦に残る痕跡 (국립중앙문화재연구소2017から転載)



第11図 無文軒平瓦の製作痕跡および比較資料 (국립중앙문화재연구소2017から転載)



第12図 忠州塔坪里遺跡出土唐草文軒平瓦の製作痕跡および製作方法の復元
(국립중앙문화재연구소2017から転載)

IV. 日本九州地域における出土瓦の現況¹³と製作の特徴

日本国内では近畿地域とともにもっとも早く瓦生産が始まった地域は九州である。九州内においても福岡県の筑前地域では初期瓦が集中的に出土する。遺跡で瓦と共伴する須恵器の編年を基準とすると、少なくとも6世紀末には瓦生産がおこなわれていたとみられる。この時期に製作された瓦は瓦陶兼業窯で、土器生産に携わっていた在地工人によって製作された可能性が高いと理解されている。

筑前地域の6世紀末から7世紀後半に相当する瓦については、これまで何度も報告されてきた¹⁴。この時期の遺跡としては、神ノ前2号窯跡、野添13号窯跡、牛頸日ノ浦17号住居跡、月ノ浦I号窯跡、小田浦窯跡群28地点、惣利西遺跡2・4号住居跡、那珂遺跡などがある。

以下では、これらの遺跡から出土した瓦を軒丸瓦、丸瓦、平瓦の順で、その様相について検討していく。

1. 軒丸瓦

無文軒丸瓦をはじめとして多様な種類の蓮華文軒丸瓦が出土している。無文軒丸瓦は神ノ前2号窯跡、惣利西遺跡2号住居跡、那珂遺跡22次調査のSX04および23次調査のSD89地点で出土した。この軒丸瓦は型を使わず、原型の粘土板をそのまま利用した瓦当面上に、瓦桶を使わず粘土紐を巻き上げて丸瓦部を成形し、不要な部分を切り取り完成させている。

蓮華文軒丸瓦は多様な文様と製作技法が確認されており、月ノ浦I号窯跡と那珂遺跡で出土している。月ノ浦I号窯跡で出土した蓮華文軒丸瓦は2種類あり、弁端が丸い単弁九葉蓮華文軒丸瓦と花卉が菱形を呈する単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。これらの軒丸瓦はみな文様が陽刻された瓦当範を利用して瓦当面を表出し、瓦当裏面に粘土紐を巻き上げて丸瓦部を円筒形に作った後、不要部を切り取って完成させている。瓦当裏面にはどちらも指頭圧痕とナデによる調整痕が残っている。那珂23次SD89地点では、月ノ浦I号窯跡の花

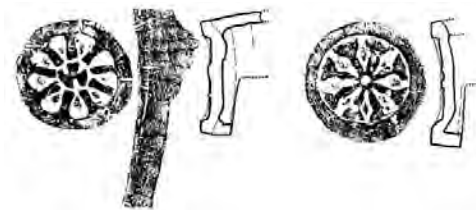
弁が菱形を呈する単弁蓮華文軒丸瓦と同範の軒丸瓦が出土した。

一方、那珂遺跡では軒丸瓦が堅穴建物、井戸、周溝などから出土している。ここでは上述した神ノ前2号窯跡のように泥条盤築技法で製作された無文軒丸瓦、月ノ浦I号窯跡出土品と同範の菱形蓮華文軒丸瓦のほかにも多種多様な軒丸瓦がある。まず、弁端隆起型単弁八葉蓮華文軒丸瓦は同範3点が井戸53号から出土した。瓦当裏面は不整なナデもしくはタタキ後にナデが施された。周溝から出土した単弁蓮華文軒丸瓦片は竹状模骨丸瓦と接合する。

次に、単弁七葉蓮華文軒丸瓦は周溝とSC3014から同範2点が出土した。このうちの1点は竹状模骨瓦桶で製作された丸瓦と接合する。2点はいずれも瓦当面中央が凹んでいるが、これはほかとは異なり、分割前に円筒状の行基式丸瓦を置いた上に瓦当面を接合したためと考えられる。行基式丸瓦上端部が上になるように置いたか、あるいは切り捨てる丸瓦部を下になるように置いたために生じた形態である。これと同じ製作技法の軒丸瓦が周溝内からもう1点確認されているが、七葉蓮華文軒丸瓦を模倣し、瓦当面に蓮華文を線刻したものである。215号住居跡からは、樹枝文が線刻された、赤褐色で硬質の円形粘土板が出土している。軒丸瓦の瓦当と考えられる。

2. 丸瓦

瓦桶の種類によって、瓦桶を使わないもの、竹状模骨瓦桶を使ったもの、板状模骨の瓦桶を使ったもの、円柱形瓦桶を使ったものの4種に分類できる。瓦桶を使わずに製作された丸瓦はいずれも玉縁式で、粘土紐で成形したものである。叩き文様は横方向にナデ調整を施し、叩き文様を消していないもの、線文、細格子文などがある。内面には布目痕はなく、回転ナデの痕跡があり、部分的に当て具痕が確認されるものもある。神ノ前2号窯跡



第13図 月ノ浦窯跡出土軒丸瓦



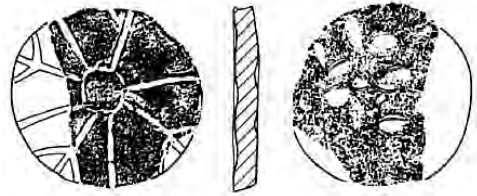
第15図 那珂遺跡井戸53号出土軒丸瓦



第14図 神ノ前2号窯跡出土軒丸瓦



第16図 那珂遺跡周溝等出土軒丸瓦



第17図 那珂遺跡215号住居跡出土軒丸瓦

ではこの種類の丸瓦のみが出土し、小田浦窯跡群28地点でも出土している。

竹状模骨瓦桶を用いて製作された丸瓦は線文、格子文のタタキが施され、内面には竹状模骨の連結痕が残る。こうした丸瓦は月ノ浦I号窯跡、野添13号窯跡、那珂遺跡

から出土している。板状模骨の瓦桶を使用した丸瓦の叩き文様は線文と格子文などであり、月ノ浦I号窯跡、惣利西遺跡2・4号住居跡でみられる。円柱形瓦桶を使用した丸瓦は玉縁式で、惣利西遺跡2・4号住居跡、月ノ浦I号窯跡で出土している。

3. 平瓦

瓦桶の有無・種類によって、瓦桶を使わないもの、模骨瓦桶を使用するものの2種に分類できる。瓦桶を使わずに製作された平瓦は基本的に粘土紐で成形している。タタキの文様は丸瓦と同様、無文もあり、線文や格子文などがある。土器口縁部のように端部を丸く処理したものもあり、小田浦窯跡群28地点、神ノ前2号窯跡、那珂遺跡で出土する。

模骨瓦桶を使用した平瓦は粘土紐、粘土板の素地どちらもが確認されており、模骨の幅は1.5~3.4 cmを測る。叩き文様は線文、格子文があり、分割界線として使用された傷が観察されるものもある。内面には同心円文や無文の当て具痕がみえるものがある。野添13号窯跡、月ノ浦I号窯跡、小田浦窯跡群28地点、那珂22次SX04および23次SD89地点で出



第18図 那珂窯跡出土丸瓦



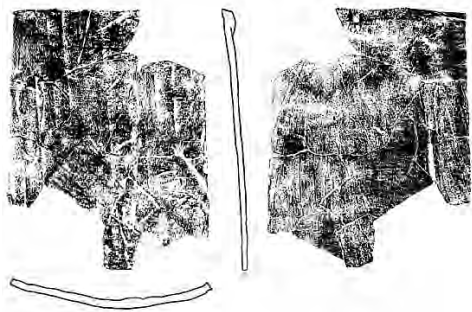
第19図 惣利西遺跡出土丸瓦



第20図 小田浦窯跡出土平瓦



第21図 野添13号窯跡出土平瓦



第22図 月ノ浦I号窯跡出土平瓦

土している。

4. 小結

これまで九州筑前地域の神ノ前2号窯跡、野添13号窯跡、月ノ浦I号窯跡、小田浦窯跡群28地点、惣利西遺跡2・4号住居跡、那珂遺跡などから出土した瓦を検討した。軒丸瓦の瓦当文様は無文、蓮華文があり、丸瓦と平瓦はいずれも無瓦桶によるものと模骨瓦桶が使用されるものがあり、素地もまた粘土板と粘土紐がそれぞれ観察できた。特に、那珂遺跡で出土した蓮華文軒丸瓦はかつて百済との関連性が指摘されていたが、それ以外の遺跡で出土する蓮華文や無文軒丸瓦は朝鮮半島に源流を求めるのは難しい。

そのなかの一つが、花卉が菱形や滴水形をなし、文様部分を陰刻で表した月ノ浦I号窯跡出土の軒丸瓦である。この軒丸瓦はいずれも丸瓦部を泥条盤築技法で成形し、続いて不必要な部分を切り取ることで製作されている。あえてこの類例を朝鮮半島で探すならば、時期的に開きはあるが類似する文様を持つものとして、ソウルの夢村土城と三成洞土城で出土した蓮華文軒丸瓦を挙げることができる。このうち、後者の瓦は隼上がり瓦窯跡で出土した高句麗系軒丸瓦の源流と判断できる遺物で、隼上がり瓦窯跡が7世紀前半であるという点から「高句麗新羅系瓦」と呼ばれている¹⁵。

九州においてもっとも早い6世紀末から7世紀初頭の瓦生産地である福岡県太宰府市の神ノ前2号窯跡では、回転台上に瓦当範なしに丸い粘土板をそのまま軒丸瓦当面として利用した無文瓦当、その上に粘土紐を巻き上げて成形した玉縁式丸瓦と、瓦桶なしに粘土紐や粘土板で成形した平瓦が共伴した。このような事実から、神ノ前2号窯跡の瓦製作技法は百済を含む朝鮮半島、日本の畿内地域とは異なり、瓦工人ではない在地の土器工人によって生産されたものと推測される。

那珂遺跡で出土した樹枝文を線刻した粘土板は、漢城期の百済のものと同様面でのみ類似する。また、花卉が三角形をなす蓮華文軒丸瓦は同じ文様および製作技法のものは朝鮮半島に見出せない。これらの瓦は瓦当面が凹むほかの瓦当とは異なり、円筒形の竹状模骨による行基式丸瓦の端部に丸い粘土板をかぶせ、上から瓦範を押し付けて瓦当面を作り、さらに不要部分を切り取る方法で製作されている。

一方、九州地域で出土した平瓦は内面に当て具痕が確認される場合が多い。瓦桶なしに粘土紐を巻き上げて成形した型式だけでなく、模骨瓦桶に粘土板を巻き付けて成形した型式の瓦でも当て具痕が確認されることは注目される。当て具痕は端部でのみ観察されるのではなく、内面のほぼ全面にわたってみられることもある。模骨瓦桶を使用し、端部に当て具痕が観察される平瓦は、河東姑蘇城や光陽馬老山城、慶州月城などで確認されている。また、模骨瓦桶を使用し、内面全面に当て具痕が観察される平瓦は堂浦城、無等里1 堡壘、阿未城など、高句麗の山城でみられる内面縄叩き平瓦と製作技法の面で類似する。

近畿地域の造瓦技術は百済から完成された形で導入されたため、軒丸瓦の文様や平瓦の製作技法は定型性を帯びている。九州地域的那珂遺跡でみられる蓮華文軒丸瓦の文様は泗泚期の百済のものと同様している。一方、九州地域では瓦桶を使用せずに土器製作技法で作られた平瓦、多様な種類の瓦桶を使用して作られた平瓦、瓦範を使わないもの、使うものなど多彩な瓦当文様が現れる。

特に、土器製作技法で作られた平瓦は漢城期の百済、新羅でもみられる。九州で出土する丸瓦は竹状模骨、簾状模骨の瓦桶を使用しており、それぞれ大田月坪洞遺跡と鶏足山城、麗水鼓築山城および光陽馬老山城などで確認されている。このことから、こうした瓦は百済や馬韓から到来した渡来人の影響で製作されたものと推定できよう¹⁶。

平瓦は瓦桶を使わずに製作したり、模骨瓦桶を使用して製作したりするが、最近になって慶州の月城でこのような型式が出土しており、注目される。月城からは慶州勿川里遺跡と似た百済系蓮華文軒丸瓦の出土例もある¹⁷。ただし、この時期の日本の平瓦は円筒形瓦桶ではなく、模骨の瓦桶を使用している。同時期の百済の平瓦は模骨瓦桶、新羅の平瓦は無瓦桶、円筒形瓦桶、模骨瓦桶を使用し、円筒形瓦桶の出土率が高いのが特徴的である。

九州の造瓦技術が多様である点について、比嘉えりかは、畿内地域が大規模な仏教寺院建立を目的とするならば、九州は仏教ではなく外交関連施設と関連したものであると説明した。九州では既往の須恵器生産窯のなかで瓦生産を開始したため、当初、瓦は須恵器とともに少量の瓦を生産するシステム下で須恵器の製作技法に倣い、徐々に本格的な瓦製作技法が適用されていった。これに対して、畿内では瓦が百済地域との共通性を持ち、須恵器窯とは完全に別の構造、別の場所で、飛鳥寺の屋根全体を覆うことを目的に大規模生産がおこなわれたのである¹⁸。



第23図 慶州月城出土蓮華文軒丸瓦



第24図 慶州月城出土異形瓦

近年、公州公山城、慶州月城など三国時代の初期瓦研究において重要な遺跡の発掘が継続的におこなわれている。このような成果が蓄積されれば、両国における初期瓦研究についての様々な疑問点が次第に解決されていくことが期待される。

V. おわりに

本稿では朝鮮半島と日本の都城以外の地域である中原地域と九州地域を中心に、6～7世紀の瓦製作について観察し、その製作的特徴を検討した。中原地域の瓦は高句麗と百済、新羅の製作的特徴を備えた平瓦が確認される。これらは、都城地域と類似するものもある一方で、ほかの方法で製作された軒丸瓦が混在している。地域と時期によって多様な瓦が製作・供給されていた様相は三国の熾烈な勢力争いと領土拡張による結果と認識することができる。ここには遺跡を占有した三国の瓦製作ならびに需給方法、在地的伝統などが複合的に影響を及ぼしたはずである。中原地域を中心に都城の主な情報を受容するとともに、独自の方法を通して瓦を製作・供給する生産集団の存在も推定することができよう。

一方、百済から完成された形で造瓦技術が導入され、定型性を帯びて発展した近畿地方の瓦磚文化と異なり、九州地域は多彩な方法を駆使して瓦を製作した。九州地域の瓦製作にみえる多様な様相は、近年の朝鮮半島内の遺跡で出土する瓦からも、確認される例が増えている。九州地域の瓦は土器製作技術をもとに須恵器窯で初めて製作されており、今後朝鮮半島内の都城をはじめとした多くの地域との関連性を具体的に検討する必要がある。

これまで日韓の瓦研究は都城を中心に製作の特徴と需給関係、展開過程について検討した研究が主であった。都城以外の地域にも多様な方法で製作された瓦が出土する現状において、中原地域と九州地域を対象に瓦製作の一端を検討したが、今後の資料の蓄積が進み、精密な分析がおこなわれれば、古代瓦の地域的特徴と展開過程をより総体的に把握することができると考えられる。

註

1 박은선 「益山地域 百濟遺蹟의 平기와 特徴과 變遷」 『百濟研究』 61, 2015年。

- 2 최영희 「百濟 泗泚期の 造瓦系統과 生産體制」 『百濟研究』 63, 2016年。
- 3 前掲註 2。
- 4 최영희 「신라 조와체제의 특성」 『경주 월성기와 연구의 전망과 과제』 국립경주문화재연구소·한국기와학회, 2019年。
- 5 以下の論考を中心に作成した。최영희 「日本 畿内地域 初期造瓦技術의 導入과 展開」 『先史와 古代』 第61號, 한국고대학회, 2019年。
- 6 「ネイバー知識百科」瓦博士、飛鳥寺址の内容から一部を抜粋した。
- 7 596年に塔が建立され、609年に金銅釈迦像が安置、完工した。
- 8 최영희 「日本 畿内地域 初期造瓦技術의 導入과 展開」 (前掲註 5)。
- 9 최영희 「日本 畿内地域 初期造瓦技術의 導入과 展開」 (前掲註 5)。
- 10 この類型の軒丸瓦は「中原様式」と呼ばれている。
- 11 최영희 「中原地域 造瓦技術의 展開-충북·경기서부·강원영서지역의 막새를 중심으로」 『중원의 와당』 국립강화문화재연구소, 2017年。
- 12 최영희 「中原地域 造瓦技術의 展開-충북·경기서부·강원영서지역의 막새를 중심으로」 『중원의 와당』 (前掲註11)。
- 13 以下の論文にもとづいて作成した。比嘉えりか 「初期瓦研究の現状と課題-筑前地域を中心に-」 『七隈史学』 第 9号、2008年。이인숙 「한일 6~7세기 기와의 관련성 검토-평기과를 중심으로-」 『韓日文化財論集Ⅱ』 국립문화재연구소, 2010年。
- 14 比嘉えりか 「初期瓦研究の現状と課題-筑前地域を中心に-」 (前掲註13)、이인숙 「한일 6~7세기 기와의 관련성 검토-평기과를 중심으로-」 (前掲註13)、소재운 「백제와 일본의 초기 기와를 통해 본 기와 제작양상 비교 연구」 『先史와 古代』 第58號, 한국고대학회, 2018年。
- 15 亀田修一 『日韓古代瓦の研究』 吉川弘文館, 2006年、p.478。近年、소재운是那珂遺跡215号竪穴住居址で出土した軒丸瓦文様と漢城期の百濟의 錢文軒丸瓦との類似性を取り上げ、論じている (소재운 「백제와 일본의 초기 기와를 통해 본 기와 제작양상 비교 연구」 (前掲註14)。
- 16 소재운 「백제와 일본의 초기 기와를 통해 본 기와 제작양상 비교 연구」 (前掲註14)。
- 17 이인숙 「경주 월성 A 지구 (서편지) 출토 삼국시대 기와」 『한국고고학의 기원론과계통론』 한국고대학회, 2016年。
- 18 比嘉えりか 「初期瓦研究の現状と課題-筑前地域を中心に-」 (前掲註13)。

参考文献

- 국립경주문화재연구소·한성백제박물관 『한성에서 만나는 신라 월성』, 2019年。
- 국립부여문화재연구소 『백제 사비기 기와 연구』 IV, 2012年。
- 국립부여문화재연구소·한국기와학회 『6~7세기 백제·신라 기와의 대외교류』 (학술세미나자료집), 2016年。
- 국립중원문화재연구소 『중원의 와당』, 2017年。
- 국립중원문화재연구소 『중원지역 기와연구와 전환기』 (학술세미나자료집), 2018年。

고대 한일 도성 외 지역 초기 기와 검토
-한반도 중원지역, 일본 규슈지역을 중심으로-

문 옥 현 · 이 인 숙 · 장 성 윤 · 민 경 선 · 최 문 정

요 지 본고에서는 한반도와 일본의 도성 외 지역인 중원지역과 규슈지역을 중심으로 6~7세기 기와 제작의 양상을 살펴보고 제작 특성을 검토하였다. 중원지역의 기와는 고구려와 백제, 신라의 제작 특성을 고루 갖춘 평기와가 확인되며, 도성지역과 유사하거나 다른 방식으로 제작된 막새기와가 혼재하고 있다. 지역과 시기에 따라 다양한 기와가 제작 및 수급되는 양상은 삼국의 치열한 각축과 영토 확장에 따른 결과로 인식될 수 있다. 여기에는 유적을 점유한 삼국의 기와 제작 및 수급방식, 재지적 전통 등이 복합적인 영향을 미쳤을 것이다. 중원지역을 중심으로 도성의 주된 정보를 수용하면서 나름의 방식을 통해 기와를 제작·수급하는 생산집단의 존재도 추정해 볼 수 있다.

한편 백제로부터 완성된 형태로 조와기술이 도입되어 정형성을 띠며 발전한 긴키지역의 와전문화와 달리, 규슈지역은 다채로운 방식을 구사하며 기와를 제작하였다. 규슈지역의 기와 제작에서 보이는 다양한 양상은 최근 한반도 내 유적에서 출토되는 기와에서도 확인되는 사례가 증가하는 추세이다. 규슈지역의 기와는 토기제작기술을 바탕으로 스에키요에서 처음 제작되었는데, 향후 한반도 내 도성을 비롯한 여러 지역과의 관련성을 구체적으로 검토해 볼 필요가 있다.

지금까지 한일의 기와연구는 도성을 중심으로 제작 특성과 수급관계, 전개과정을 살펴본 연구가 주를 이루었다. 도성 외 지역에도 다양한 방식으로 제작된 기와가 출토되는 현 상황에서 중원지역과 규슈지역에 한하여 기와제작의 일단을 검토하였는데, 향후 자료의 축적과 세밀한 분석이 병행된다면 고대 기와의 지역적 특징과 전개과정을 보다 총체적으로 파악할 수 있을 것으로 생각된다.

주제어 : 도성, 중원지역, 규슈지역, 기와, 조와기술

Review on Early Roof Tiles Outside Ancient Capital City of Korea and Japan: Focusing on Jungwon region of Korean Peninsula and Kyushu region of Japan

**Moon Okhyun, Yi Insuk, Jang Sungyoon,
Min Kyongsun, Choi Moonjung**

Abstracts: This paper examines the development and characteristics of roof tile making in the 6th and 7th centuries in Jungwon region of the Korean Peninsula and Kyushu area of Japan, which were located outside the capital cities of Korea and Japan, respectively. In the central area, flat roof tiles having the production features of those from Goguryeo, Baekje, and Silla are confirmed along with end roof tiles made similarly to or differently from those used in the capital city. Various roof tiles were manufactured and supplied according to region and period, presumably as a result of the fierce competition and territorial expansion between the Three Kingdoms. Method of roof tile production, supply and demand method, and long-standing tradition of Three Kingdoms that occupied the remains would have had a complex effect. We may presume the existence of a production group in central area that manufactured and supplied roof tiles through their own method while accepting information from the capital city.

Unlike the tile and brick culture of the Kinki region that was developed in standard form with the introduction of a full-fledged tile making technique from Baekje, the Kyushu region used different tile manufacturing methods. Various patterns observed in the production of roof tiles in the Kyushu region are also increasingly confirmed in the roof tile remains recently excavated in the Korean Peninsula. Roof tiles in the Kyushu region were first manufactured in Suekiyo based on earthenware manufacturing technique and their relevance to the capital city and other regions on the Korean Peninsula needs to be further examined in detail.

Studies on roof tiles in Korea and Japan, thus far, have mainly focused on the manufacturing characteristics, supply and demand, and development process of roof tiles manufactured in capital cities. This paper examines roof tiles produced in Jungwon region and Kyushu region only while many different styles of roof tiles are unearthed outside the capital cities. If more information is collected and detailed analysis is conducted, the regional characteristics and development process of ancient roof tiles will be understood more comprehensively.

Keywords: Capital city, Jungwon region, Kyushu region, roof tile, tile and brick manufacturing technique